

朱子の性理論

青木晦藏稿

第五章 叙論

第十三節 性論の淵源

朱子の性理論に含まるゝ問題は(一)人性に關するもの、(二)心情に關するもの、(三)道體に關するものとする。此れ等の諸問題も前に述べたる理氣論と同じく古聖賢の思想に本づきて之を大成したるものなれば、その説の由りて來たる所を明かにせざるべからず。今先づその性論の淵源を尋ぬるに主として孔子の易及び論語に見わたる思想、子思の中庸に説ける思想、孟子の思想、及び周濂溪、程明道、程伊川、張橫渠等の思想を根柢と爲し、并せて荀子及び楊雄、韓愈等の説も包容し融和化合して以て大成したるものと見るを得べし。朱子の性論の包容の大にして統一完成せる所の古人に優るは實に此處に在り。

(一)孔子の性説 孔子は常に詩書禮樂を語りて性と天道とに就ては語るこゝ少きが如くなれども全く之を口にせざるにあらず。故に性と天道との關係を述べて、

一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。(周易繫辭傳第五章)

と云へり。一陰一陽之謂道は宇宙の實在を説明し、繼之者善也は天命の流行に就て云ひ、成之者性也は人物の稟けて生まるゝ性を説けるものにして、朱子の性に關する思想の實に此れに本づけることは復た動かすべからざる所なり。故に朱子の言に

繼之者善。方是天理流行之初。人物所資以始。成之者性。則此理各自有箇安頓處。故爲人爲物。或昏或明方是定。(朱子語類卷七十四、廿四頁)

と云へり。此れに據れば此に擧ぐる所の孔子の言は本然の性を云へるものにして、氣質の性に就て氣質を雜へずして本然の性のみを抽象して云へること、猶不離の理氣に就て氣を雜へずして太極なる理(又道とも云ふ)のみを抽象して説くが如し。而して孔子の此の説は子思の所謂天命之謂性の説の基礎となり、又孟子の性善説の根柢となれり。故に朱子は孟子の説と孔子の説との關係を述べて、易大傳言繼善。是指未生之前。孟子言性善。是指已生之後。雖曰已生。然其本體初不相離也。(朱子語類卷七十四、廿四頁)

問。天理變易無窮。由一陰一陽。生々不窮。繼之者善。全是天理。安得不善。孟子言性之本體。以爲善者是也。曰。此却無過。(同上卷四、十四頁)

と云へり。孔子の言と孟子の言とを精密に比較するときには些少の差異なきにあらざることは朱子の

いへるが如くなれども、大體より云へば孟子の説の孔子の言に本づけることは否定すべからず。故に朱子の門人陳北溪も朱子の説を承けて

夫子所_レ謂善。是就_二人物未_レ生之前。造化源頭處_一説。善乃重字爲_二實物_一。若_三孟子所_レ謂性善_一。則是就_二成_レ之者性處_一説。是人生以後事。善乃輕字。言_二此性之純粹至善_一耳。其實由_二造化源頭處_一。有_二是繼_レ之者善_一。然後成_レ之者性時。方能如_レ是之善。則孟子之所_レ謂善。實淵_二源於夫子所_レ謂善者_一而來。而非_レ有_二二本_一也。(字義詳講卷上、二十頁)

と云へる所を見れば孟子の説はもと孔子の言に淵源し而して朱子の説亦孔孟二子の言に淵源したること明かなり。孔子は此の如く氣質を雜えず本然の性を抽象して云へることありと雖も、又氣質の性に就て説けることなきにあらず。即ち孔子が下文に於て仁者見_レ之謂_二之仁_一。知者見_レ之謂_二之知_一。百姓日用而不_レ知。故君子之道鮮矣。(周易繫辭上傳)と云へるを見れば、是れ氣質の爲めに局せられてその賦與せられたる本性を完うすること能はざるを説けるものにして、氣質の性を謂へるものと見るを得べし。故に朱子は此の理を説明して

此言萬物各具_二此性_一。但氣稟不_レ同。各以_二其性之所_レ近窺_レ之_一。故仁者見_レ之得他發生流動處_一。便以爲_レ仁。知者只見_レ之得他貞靜處_一。便以爲_レ知。下_レ此一等。百姓日用之間。習矣不_レ察。所_二以君子之道鮮_一矣。(朱子語類卷七十四、廿四頁)

と云へり。而して朱子は論語に見わたる孔子の

性相近也。習相遠也。(論語陽貨第十七)

の言も此れと同じく氣質を雜へて云へるものとせり。故に之を解して曰く、

此所謂性兼氣質而言者也。氣質之性。固有美惡之不同矣。然以其初而言。則皆不甚相

遠也。但習於善則善。習於惡則惡。於是始相遠耳。(論語集注卷之九)

此れに由りて之を觀れば孔子は一面に於ては氣質の性を説き、一面に於ては氣質の性に就て氣質を雜えずして本然の性のみを抽象して説けるものと見るを得べし。然るに本然の性と云ひ氣質の性と謂ふが如きは、宋儒の創めていへる所にして孔子の未だ嘗て言はざる所なれども、宋儒の思想を以て孔子の説を解釋するときは、所謂本然の性及び氣質の性の意味あることは否定すべからず。是れ朱子が繼之者善也。成之者性也を以て本然の性と爲し、仁者見之謂之仁云々及び性相近也を以て氣質の性と爲す所以にしてその理なしと謂ふべからず。

(二)子思の性説 朱子の性理説の根柢を爲せるものには孔子の孫子思が中庸に於て説ける所の人性に關する思想ありて、子思は孔子の思想の易の繫辭傳に見ゆるものと同じく、吾人に存する性はもと天より賦與せられたるものにして天命と性とを以て同一の實在と爲せり。其の言に

天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。(中庸第一章)

とあるものは是れなり。朱子の解する所に據れば子思の所謂天命之謂性性は本然の性を説けるものにして、天に在りては命と謂ひ人に在りては性性と謂ふ。その名は異なれどもその實は同一の存在なりと爲し、且天命の性は氣質を雜えずして云へるものと爲せり。故に曰く、

這箇理在天地間一時只是善。無有不善者。生人物得來。方始名曰性。只是這理在天則曰命。在人則曰性。(朱子語類卷五、二頁)

天命之謂性。是就人身中。指這箇是天命之性。不雜氣質而言。是專言理。若云兼言氣。便說率性之道不去。如太極不離乎陰陽。而亦不離乎陰陽也。(中庸或問小註卷一、一頁)

子思の所謂天命の性は人生一切の根本原理にして所謂道も行爲も皆此れより發するものなれば、朱子は之を説明して

天命之謂性。言天之所以命乎人者。是則人之所以爲性也。蓋天之所以賦與萬物。而不能自己者命也。吾之得乎是命以生。而莫非全體者性也。故以命言之。曰元亨利貞。而四時五行。庶類萬化。莫不由是而出。以性言之。則曰仁義禮智。而四端五典。萬物萬事之理。無不統於其間。蓋在天在人。雖有性命之分。而其理則未嘗不一也。

(中庸或問大全五頁)

と云へり。故に子思の所謂天地位焉。萬物育焉の如きも此の性より發したるものにして、一事一物

皆性に根柢せざるものなし。而して子思が人生最高の理想とせる誠も性の徳にして誠を盡すの結果己を成し物を成し天地の化育を賛け所謂聖神功化の妙を極むるに至るも亦性に本づくにあらざるなし。此の如く解するは朱子の本旨にして此の意味に於て子思の思想が朱子の性論の淵源を爲せるは復た疑を容れざる所なり。

(三) 孟子の性説 次ぎに朱子の性論の根柢を爲せる最も有力なるものは孟子の説ける性論なりとす。孟子は始めて性善説を唱へたる人にして孔子及び子思の未だ發せざる所を闡明したり。而して孟子は宋儒の所謂氣質の性を知らざるにあらざれども、主として宋儒の所謂本然の性に關する理を明かにし本然の性の善なることを説けり。今孟子の性善説を考察するに孟子は自己の性論の立脚地を明かにして、

天下之言性也。則故而已矣。故者以_レ利爲_レ本。(孟子離婁章句下)

と云へり。孟子の所謂_レ故とは今の所謂經驗の意味にして是れ性を論ずるには社會に於て經驗したる事實を根據とすべくして空理想に涉るべからず。而して經驗したる事實は自然の勢に従ふ者にして強て人爲を加へたる不自然のものなる可らざるを言へるなり。故に朱子は之を解して以爲らく性者人物所_レ得以生_レ之理也。故者其已然之跡。若_レ所謂天下之故_レ者也。利猶_レ順也。語_レ其自_レ然之勢_レ也。言事物之理。雖_レ若_レ無_レ形而難_レ知。然其發見之已然。則必有_レ迹而易_レ見。故天下

之言ノ性者。但言ニ其故。而理自明。猶ニ所謂善言ノ天者。必有ノ驗ニ於人ニ也。然其所ノ謂故者。又必本ニ其自然之勢。如ニ人之善水之下。非下有ノ所ニ矯揉造作ニ而然者也。若ニ人之爲ノ惡水之在山。則非ニ自然之故ニ矣。(孟子集注卷之四)

是れ孟子が性を論ずる立脚地を示したるものにして孟子は此の如く經驗的事實に本づきて性善を説けるを以てその議論は確乎として動かすべからざるなり。而して孟子は此の基礎觀念に據りて性に關する意味を説明して

口之於ノ味也。目之於ノ色也。耳之於ノ聲也。鼻之於ノ臭也。四肢之於ニ安佚ニ也。性也。有ノ命焉。君子不ノ謂ノ性也。(孟子盡心章句下)

と云へり。耳目鼻口及び四肢に於ける聲色臭味及び安佚を欲するの性なるものは所謂氣質の性にして、君子は此れを以て性と爲さずして天より賦與せられたるものを以て本性と爲すものなれば、孟子の所謂性は子思の所謂天命之謂ノ性と同じく朱子の所謂本然の性を指して云へること明かなり。故に朱子も之を説いて左の如く云へり。

夫口之欲ノ食。目之欲ノ色。耳之欲ノ聲。鼻之欲ノ臭。四肢之欲ニ安逸ニ。如何自會ニ恁地ニ。這固是天理之自然。然理附ニ於氣ニ。這許多却從ニ血氣軀殼上ニ發出來。故君子不ノ當ニ以ノ此爲ノ主。而以ニ天命之理ニ爲ノ主。都不下把ニ那箇ニ當ノ事。但看ニ這理合ニ如何。有ノ命焉。此命字是就ニ理上ニ説。君

子不_レ謂_レ性也。此性字是就_レ氣上_二說。(朱子語類卷六十一、四頁)

而して孟子は自己の定めたる立脚地に根柢して本然の性の善なることを證するに二箇條を以てせり。即ち(イ)は四端の情の發現の善によりて性の善なることを證明し、(ロ)は人情の自然に善に趨き惡に趨かざるによりて性の善なることを證明するもの是れなり。

(イ)性は本來渾然たる全體にして聲臭の言ふべきものなく形象の見るべきものなければ、その善なることを識認し得べきものにあらず。故にその善なることを知らんとするには性の外に發現したる現象に就て之を識認せざるべからず。故に孟子は四端の心の發現したる所に就て之を知らんとせり。その言ふ所に據れば左の如し。

乃若其情。則可_ニ以爲_レ善矣。乃所_レ謂善也。若_ニ夫爲_ニ不善。非_ニ才之罪_一也。惻隱之心。人皆有_レ之。羞惡之心。人皆有_レ之。恭敬之心。人皆有_レ之。是非之心。人皆有_レ之。惻隱之心仁也。羞惡之心義也。恭敬之心禮也。是非之心智也。仁義禮智。非_ニ由_レ外鑠_レ我也。我固_ニ有_レ之_一也。弗_レ思耳矣。故曰求則得_レ之。舍則失_レ之。或相倍蓰而無_レ算者。不_レ能_レ盡_レ其才_一者也。(孟子告子章句上)

朱子の説く所に據れば性はもと渾然一體なるものなれども之を分別して觀れば仁義禮智の四性と爲すを得べし。而して仁義禮智の四性は發して惻隱羞惡恭敬是非の情となりて外に發するを以て、此の四端の發の善なる所より推せば四端の情の發現する所以の根本原理たる仁義禮智の性の善なるこ

とを知り得べきものとせり。故に以爲らく

蓋孔子時。性善之理素明。雖不詳著其條。而說自具。至孟子時。異端蠡起。往々以性爲不善。孟子懼是理之不_レ明。而思有以明之。苟但曰渾然全體。則恐其如無_レ星之秤無_レ寸之尺。終不_レ足以曉_レ天下。於_レ是別而言之。界爲四破。而四端之說。於_レ是而立。蓋四端之未_レ發也。雖寂然不動。而其中自有_レ條理。自有_レ間架。不_レ是籠侗都無_レ一物。所以外邊纔感。中間便應。如赤子入_レ井之事感。則仁之理便應。而惻隱之心。於_レ是乎形。如過_レ廟過_レ朝之事感。則禮之理便應。而恭敬之心。於_レ是乎形。蓋由_レ其中間衆理渾具。各各分明。故外邊所_レ遇。隨_レ感而應。所以四端之發。各有_レ面貌之不_レ同。是以孟子析而爲_レ四。以示_レ學者。使_レ知_レ渾然全體之中。而燦然有_レ條若_レ此。則性之善可_レ知矣。(朱子文集卷五十八、廿二頁)

此の説は恰も水の末流の清きに由りてその源頭の水の清きを知るが如きものにして四端の發の善によりてその根原の性の善を知るを云へるなり。更に云へば情の善によりてその根本たる性の善を知るものなり。蓋し性は未發の原理にして情は性の發動したる已發の作用に屬するものなれば、末より溯りて本を知り已發より溯りて未發の状態を知り得べきなり。

(ロ)孟子が告子と問答せる所に據れば孟子は人の心理作用の自然に發露する所を見れば、必ず善に趨くべき傾向あるものにして人意を加ふに至りて始めて惡を爲すものと認めたるが如し。

告子曰。性猶湍水也。決諸東方則東流。決諸西方則西流。人性之無分於善不善也。猶水之無分於東西也。孟子曰。水信無分於東西。無分於上下乎。人性之善也。猶水之就下也。人無有不善。水無有不_レ下。今夫水搏而躍_レ之。可_レ使_レ過_レ類。激而行_レ之。可_レ使_レ在_レ山。是豈水之性哉。其勢則然也。人之可_レ使_レ不善。其性亦猶_レ是也。(孟子告子章句上)

と云へるもの即ち是れなり。而して此の説も前に擧ぐる所と同じく情の上に發現したる善より推して性の善なるを知るものにして直に性の上に就て云ふものにあらず。故に朱子は之を解して

觀_レ水之流而必下。則水之性可知。觀_レ性之發而必善。則性之蘊_レ善。亦可_レ知矣。(孟子或問小注 卷十一、一頁)

性本善。故順_レ之而無_レ不善。本無_レ惡。故反_レ之而後爲_レ惡。非_下本無_レ定體。而可_レ以無_レ所_レ不_レ爲_レ也。(孟子集注卷之六)

と云へり。此れに由りて之を觀れば性の善なること復た動かすべからず。而して所謂善とは相對的の善を謂へるものにして絶對的善を謂ふにあらず。何となれば性已に發して情となれば現象界に屬するものにして、現象界のものはずべて相對的ならざるものなきを以てなり。然れども現象的情の善より溯りて性に至れば本體なるを以て、その善たるや渾然たる至善にして一毫の惡なきものなり。而して惡なき善は之を稱して絶對善と謂ふを得べし。但朱子は此れを以て絶對的善と謂はずして情に於ける相對的善は此の性の至善の發現したるものとなせり。此の理は後章に至りて更に詳論する

の機あるべし。

(ハ) 惡の存在。此の如く性善を信する孟子は如何にして惡の存在を説明したるか。是れ孟子の性論を講究するものゝ必ず知らざるべからざる問題なりとす。然るに孟子は惡の由り起る原因を以て(一)は人欲に由るものと爲し、(二)は環境に由るものと爲せり。その言に謂ふ所の

富歲子弟多_レ頼。凶歲子弟多_レ暴。非_二天之降_レ才爾殊_一也。其所_三以_二陷_三溺其心_一者然也。(孟子告子章句上)
に據れば富歲及び凶歲は自然界より來る外因にして陷_三溺其心_一者は即ち人欲の私より生ずる内因に屬す。而して人はもと理義を好み不理義を惡むの心を有するものにして、是の心は聖凡を問はず人の等しく有する普徧妥當のものなることは孟子の所_レ謂

口之於_レ味也。有_二同耆_一焉。耳之於_レ聲也。有_二同德_一焉。目之於_レ色也。有_二同美_一焉。至_二於心_一獨無_レ所_二同然_一乎。心之所_二同然_一者何也。謂理也義也。聖人先得_二我心所_二同然_一耳。故理氣之悅_二我口_一猶_二芻豢之悅_二我口_一。(同上)

の如し。然るに外因の惡しき境遇と内因の人欲の私と合一するときはその本心を陷溺せしめ惡に墮つるに至るべし。是れ孟子が所_三以_二陷_三溺其心_一者然也と云へる所以なり。孟子は欲なるものの何に根原するかに至りては説く所なしと雖も、朱子に及んでは欲はもと人の氣質より起るものにしてその發動の過不及によりて惡を生ずるものと爲せり。此の説は孟子の説に一步を進めたるものと謂ふ

を得べし。而して孟子の性善説は主として易傳及び中庸に本づけるものなれば、孔子の所謂性相近也とはその意味を異にし、孔子は氣質を兼ねて云ひ孟子は性の根原より云へり。故に朱子は此の意を説いて

性卽理也。當然之理。無有_二不善者。故孟子之言_レ性。指_二性之本_一而言。孔子曰性相近也。兼_二氣質_一而言。(朱子語類卷之四、十三頁)

性也只是一般。天之所_レ命。何嘗有_レ異。正緣_二氣質不_レ同。便有_下不_二相似_一處。故謂_二之相近。孟子恐_四人謂_三性不_二相似。遂於_二氣質內。挑_二出天之所_レ命者。說_二與人。道_二性無_レ有_二不善。卽子思天命之謂_レ性也。(同上卷之四、十五頁)

と云へり、朱子が本然之性と氣質之性を離合して説けるものはもと孔孟思想の異同を調和せんが爲めなることも亦その一原因たるを知らざるべからず。

(四)周濂溪の性論 先秦の古代に於ける性に關する思想にして朱子の性理論の根據となりたるものは孔子子思及び孟子なることと上に述ぶるが如し。然るに宋代に至るに及んで朱子の説の基礎となたるものは主として周濂溪及び二程子張橫渠の思想なれば今此こにその説の概要を説述すべし。

周濂溪の時に當りては未だ本然氣質の説あらず。故にその説く所渾淪にして分別する所なし。その言に、

惟人也。得_二其秀_一而最靈。形既生矣。神發_レ知矣。五性感動。而善惡分。萬事出矣。(周子全書卷二、一頁)
とあるもの即ち是れなり。此の言に據れば吾人の有する本性はもと太極なる理の吾人に興へられたるものなれば、性と太極とは同一不二にして所謂純粹至善ならざるべからず。然るに吾人は又陰陽五行の氣質を得てその形體を成せるを以て、仁義禮智信の五性が外物に接觸して感動する時は、氣質の爲めに累はされて遂に惡に陥ることあり。故に至善なる性は先天的のものにして惡に流るゝは後天的に屬するものなれば、此の説は朱子に據るときは氣質の性を意味するものと謂はざるべからず。故に朱子は之を解釋して、

天地之性是理也。才到_下有_二陰陽五行_一處_上。便有_二氣質之性_一。於_レ此便有_二昏明厚薄之殊_一。得_二其性_一而最靈。乃氣質以後事。(朱子語類卷九十四、十七頁)

と云へり。蓋し吾人の現實より見れば理氣を分つを得べきものにあらざれば氣質の性の一あるのみ。然れども之を分つて言へば本然の性と氣質の性と爲すを得べし。故に周濂溪は又朱子の所謂本然の性を説いて、

誠者聖人之本。大哉乾元。萬物資始。誠之源也。乾道變化。各正_二性命_一。誠斯立焉。純粹至善者也。故曰一陰一陽之謂_レ道。繼_レ之者善也。成_レ之者性也。(周子全書卷七、四頁)

と云へり。是れ吾人の性の根原が太極に在りて而も太極と同じく眞實無妄にして純粹至善なるの理

を説けるものなれば、其の後に於ける本然性の説の如きは蓋し皆此の説に本づけるものと見るを得べし。而して周濂溪の説の易傳の思想に本づけることは復た論するを須ひざるなり。周濂溪は又朱子の所謂氣質の性を論じては、

性者剛柔善惡中而已矣。剛善爲義。爲直。爲斷。爲嚴毅。爲幹固。惡爲猛。爲隘。爲強梁。柔善爲慈。爲順。爲巽。惡爲懦弱。爲無斷。爲邪佞。惟中也者和也。中節也。天下之達道也。聖人之事也。(周子全書卷八、六、七頁)

と云へり。此所に所謂性は氣質の性なるを以て朱子も此所謂性。以氣質而言也。と云へり。蓋し性はもと純粹至善にして一毫の惡なきものなれども發して現象となれば善惡なきこと能はず。而して善惡ともに種々あれども要するに過不及なきの中に止まらざるべからず。故に朱子も此れを解して此性便是言氣質之性。四者之中。去却兩件剛惡柔惡。却又剛柔二善中。擇中而主焉。(語類卷九十四、廿五頁)と云へり。此れに據りて以て周濂溪の思想の朱子性論の根柢となれるを知り得べし。

(五)程明道の性論 程明道及び程伊川の性に關する思想は等しく朱子の性論を構成せる基礎となれりと雖も、明道伊川二子の思想には少しく異なれる所ありて、明道は主として氣質の性を説けども伊川は本然氣質の兩方面より説けり。今先づ明道が所謂性説の如何なる意味を有するかを考察するに、明道は自己の所謂性に對して之れが定義を下して、

生之謂性。性即氣。氣即性。生之謂也。(二程全書卷一、十三頁)

る云へり。此所に所謂生之謂性は伊川の所謂氣質の性に當るものにして、生とは氣質形體の有する知覺運動の如き生理的心作用を指して云ふ。蓋し人は纔に生れ來れば必ず氣質形體を有するものにして、性はその氣質形體と共に稟け來りて其中に存す。故に性は氣質形體を離れず氣質形體は性を離れず、此の二者はもと分離するを得べからざるものなれば明道は性即氣氣即性と云へるなり。

朱子之を解して生之謂性。是生下來喚做性底。便有氣稟夾雜。便不是理底性了。(朱子語類卷九十五、十三頁)と云へるは即ち此の理なり。明道の所謂生之謂性はもと告子の所謂生之謂性に本づけるものなれどもその意味する所同じからざるものあり。告子の説は朱子が生指下人物之所以知覺運動者而言。と云へるが如く専ら所謂生理的心作用を指したるものなれども、明道の謂ふ所は氣質形體の中に存する理性を意味するものなれば文字は同一にしてその意味は異れり。故に明道は更に此の定義を説明して

蓋生之謂性。人生而靜以上不容説。才説性時。便已不是性也。凡人説性。只是説繼之者善也。孟子言性善是也。(二程全書卷一、十四頁)

と云へり。此の言を見れば明道の説の告子の説と異なる所あること最も明かなり。故に朱子も之を説明して以爲らく、

人生而靜以上。卽是人物未_レ生時。人物未_レ生時。只可_レ謂_二之理_一。說_レ性未_レ得。此所_レ謂在_レ天曰_レ命也。纔說_レ性時便已不_二是性_一者。言纔謂_二之性_一。便是人生以後。此理已墮在_二形氣之中_一。不_二全是性之本體_一矣。故曰便已不_二是性_一也。此所_レ謂在_レ人曰_レ性也。大抵人有_二此形氣_一。則是此理始具_二於形氣之中_一。而謂_二之性_一。纔是說_レ性。便已涉_二乎有生_一。而兼_二乎氣質_一。不_レ得_レ爲_二性之本體_一也。然性之本體。亦未_二嘗雜_一。要_レ人就_二此上面_一。見_レ得其本體元未_二嘗雜_一。亦未_二嘗雜_甲耳。凡人說_レ性只是說_二繼_レ之者善也_一者。言性不_レ可_二形容_一。而善言_レ性者。不_レ過_下卽_二其發見之端_一而言_レ之。而性之理固可_二默識_一矣。如_四孟子言_二性善與_二四端_一是也。(朱子語類卷九十五、十七頁)

理氣の關係の不離不雜は明道の未だ明言せざる所なれども、二者の關係を云へば不離不雜を以て説くべからざるにあらず。是れ朱子が要_レ人就_二此上面_一。見_レ得其本體元未_二嘗離_一。亦未_二嘗雜_甲耳。と云へる所以なるべし。而して繼_レ之者善は易に在りては宇宙に於ける天命の流行を意味するものなれども、明道に在りては人性の發現する處に就て云ふものなれば其の意味を異にすることを知らざるべからず。是れ亦朱子の善言_レ性者。不_レ過_下卽_二其發見之端_一而言_レ之と云へる所以なり。

程明道の所謂性の氣質の性を意味すること此の如し。故に明道は本性そのものは善なるものなれども、氣稟形體と共に存する吾人の性は或は氣稟形體の爲めに動かさるゝを以て惡を爲すことあるを免れざるを以て、善は固より性なれども惡も亦性と謂はざるべからざるものと爲せり。

人生氣稟。理^{マカニ}有^{ベシ}善惡。然不下是性中元有^ニ此兩物相對而生也。有^ニ自^レ幼而善。有^ニ自^レ幼惡。是氣稟有^レ然也。善固性也。然惡亦不^レ可^レ不^レ謂^レ性也。(二程全書卷之一、十四頁)

と云へるものは是れなり。而して明道は更に之を水に譬へてその意を説明して以爲らく、

夫所^レ謂^レ繼^レ之者善也者。猶^ニ水流而就^レ下也。皆水也。有^ニ流而至^レ海遂無^レ所^レ汚。此何煩^ニ人力^レ之爲也。有^ニ流而未^レ達固已漸濁。有^ニ出而甚遠方有^レ所^レ濁。有^ニ濁之多者。有^ニ濁之少者。清濁雖^レ不^レ同。然不^レ可^レ下以^ニ濁者^レ不^レ爲^レ水也。(同上)

此れに據れば性の善なるは水の本來清きが如きものなれども、氣質形體の爲めに昏まされて惡を爲すに至るは水の土砂の爲めに濁らしめらるゝが如しと云ふに在り。故に性の本然は善なるもその結果より云へば惡も亦性と謂はざるを得ざるごとくなるべし。是れ朱子が明道の此の説を解して、

既是氣稟惡。便也牽^ニ引得^レ那性^レ不^レ好。蓋性只是搭附在^ニ氣稟上^レ。既是氣稟不^レ好。便和^ニ那性^レ壞了。所^ニ以^レ說^ニ濁亦不^レ可^レ不^レ謂^ニ之水^レ。水本清。却因^ニ人^レ撓^レ之故濁也。(朱子語類卷九十五、十六頁)

と云へる所以なり。然るに明道は惡の存在を以て氣質形體の作用に歸し之を以て根本的のものと爲さずして氣の過不及による一時的現象と見たり。故に

天下善惡皆天理。謂^ニ之惡^レ者非^ニ本惡^レ。但或過或不^レ及便如^レ此。如^ニ楊墨之類^レ。(二程全書卷二、二頁)

と云へり。故に明道に據れば氣質形體の作用に過不及ありて節に中らざるものは惡となり節に中る

ものは善となるべくしてその他に惡と稱すべきものあることなし。是れ惡の後天的存在にして先天的のものにあらざるを知るべきなり。故に朱子之を説明して

所_レ稟之氣所_レ以必有_二善惡之殊_一者。亦性之理也。蓋氣之流行。性爲_二之主_一。以_二其氣之或純或駁_一。而善惡分焉。故非_下性中本有_二物_一相對_上也。然氣之惡者。其性亦無_二不善_一。故惡亦不_レ可_レ不_レ謂_二之性_一也。先生又曰。「善惡皆天理。謂_二之惡_一者本非_レ惡。但或過或不_レ及。便如_レ此」。蓋天下無_二性外之物_一。本皆善而流_二於惡_一耳。(朱子文集卷六十七、十八頁)

と云へり。以上は明道の性論の大要にしてその特色とする所は他の宋儒と異なり別に本然の性とも氣質の性とも云はずして渾然性を説きたること孔子の性を説けるに似たる所あること是れなり。

(六)程伊川の性論。明道伊川の二子は本來その性質に異なる所あり。故に明道は學理を觀るに綜合的に説く傾向あれども伊川は分析的に考察するの傾向あり。故に性に就ても伊川は本然の性と氣質の性とを分別して説けり。而して朱子の性格は伊川に似たる所あるを以てその學說も亦伊川に承くる所多きが如し。伊川は明道が氣質の性を説けると異なり直に性の本原より説き起して

性卽理也。所謂理性是也。(二程全書卷廿四、二十頁)

と云へり。此の説は理と性との同體なることを説けるものにして此の理宇宙に在りては之を理と云ひ、而して此の理人生に在りては之を性と云ふ。理と云ひ性と云ふは宇宙に在ると人に在るとによ

りてその名を異にするのみにしてその實は一なるを云ふ。然れども其の言ふ所簡に過ぐるを以て朱子はその内容を説明して以爲らく、

程子性卽理也。此說最好。今且以_レ理言之。畢竟却無_二形影_一。只是這一箇道理在_レ人。仁義禮智性也。然四者有_二何形狀_一。亦是_二有_レ如此道理_一。有_二如此道理_一。便做_二得許多事_一出來。所以能惻隱羞惡辭避是非也。(同上卷四、九頁)

伊川の此の定義は古人の未だ道破せざる所にして正確動かすべからざるものなれば朱子は極めて之を稱賛して

伊川性卽理也一語。自_二孔孟_一後。無_二人見得到_レ此_一。亦自_レ古無_二人敢如_レ此道_一。惟伊川說得盡。這一句便是千萬世說_レ性根基。(朱子語類卷九十五、十三頁)

伊川性卽理也四字。顛撲不破。實自_二己上_一見得也來。其後諸公只聽得便記將去。實不_下曾就_二己上_一見得。故多有_二差處_一。(同上)

と云へり。此の伊川の説は極めて簡單なれども能く性の意味を盡したるものにして此れに據れば孔子の易傳の説も子思孟子の性論も皆明かに解釋するを得べし。然るに此の説はもと所謂本然の性のみを抽象して云へるものにして吾人の現實に就て云ふものにあらず。若し現實より云へば氣質の性あるのみ。故にその言に曰く、

性相近也。此言^〇氣質之性^〇。非^〇言^〇性之本^〇也。若言^〇其本^〇。則性卽是理。理無^〇不善^〇。孟子之言^〇性善^〇是也。何近之有哉。(論語集注卷之九)

此れ論語に於ける孔子の性説を解して氣質の性と爲したるものにして、氣質の性とは氣質形體を離れざる本然の性を意味す。蓋し氣質と性とは渾然一體にして分離するを得べからざるものなれば、伊川は又論^〇性不^〇論^〇氣質不^〇備。論^〇氣質不^〇論^〇性不^〇明。二^〇之^〇則^〇不^〇是。と云へり。(朱子は此の言を以て或は明道の言と爲せり。今以て伊川の言と爲す。)朱子之を解して以爲らく、

本然之性。只是至善。然不^〇下^〇以^〇氣質^〇而論^〇之。則莫^〇知^〇其有^〇昏明開塞剛柔強弱^〇。故有^〇所^〇不^〇備。徒論^〇氣質之性^〇。而不^〇自^〇本原^〇言^〇之。則雖^〇知^〇有^〇昏明開塞剛柔強弱之不同^〇。而不^〇知^〇至善之源。未^〇嘗^〇有^〇異。故其論有^〇所^〇不^〇明。須^〇是合^〇性與^〇氣質^〇之然後盡^〇。(朱子語類卷五十九十四頁)

蓋し現實に於ては氣質の性あるのみなれども性と氣とは相待つて存するものなれば、氣のみを觀て性を觀ざれば善の來る所を知らず。性のみを觀て氣を觀ざれば惡の來る所を知り得ざるべし。此れ程子に此の論ある所以なり。故に伊川は本性を以て善と爲し惡を以て氣質より生ずるものとせり。

人性皆善。所^〇以^〇善^〇者。於^〇四端之情^〇可^〇見。故孟子曰。是豈人之情也哉。至^〇於不能^〇順^〇其情^〇。而悖^〇天理^〇。則流而至^〇於惡^〇。(二程全書卷廿四、廿頁)

性卽理也。所^〇謂^〇理性是也。天下之理。原^〇其所^〇自^〇。喜怒哀樂未^〇發。何嘗不善。發而中^〇節。

則無_レ往而不善。凡言_二善惡_一。皆先_レ善而後_レ惡。言_二吉凶_一。皆先_レ吉而後_レ凶。言_二是非_一。皆先_レ是而後_レ非。(同上)

と云へるものは是れなり。但善惡言吉凶是非を云ふに當りて善吉是を先きにして惡凶非を後にするは只語調の上より來れるのみなれば伊川の說必ずしも當らず。然れども性は即ち理なるが故に善なりとの説は動かすべからざるものなり。然らば惡は何に由りて生ずるかと云へば、程子は才より生ずるものとせり。蓋し才は氣より發するものにして氣には昏明清濁の同じからざるものあるを以て、氣より發する才に過不及を生ずるを免れず。此才の過不及即ち惡となるなり。故にその言に

性出_二於天_一。才出_二於氣_一。氣清則才清。氣濁則才濁。才則有_レ善有不善。性則無_二不善_一。(同上卷二) 性即理也。理則堯舜至_二於塗人一_一也。才稟_二於氣_一。氣有_二清濁_一。稟_二其清_一者爲_レ賢。稟_二其濁_一者爲_レ愚。學而知_レ之。則氣無_二清濁_一。皆可_下至_二於善_一而復_レ性之本_上。湯武身_レ之是也。孔子所_レ言。下愚不_レ移者。則自暴自棄之人也。(同上卷廿四、廿頁)

とあるもの即ち是れなり。而して孟子が才を以て善と爲せるに反して伊川は才に善あり不善ありと爲しその見解を異にする所あり。朱子は伊川の説を以て備れりと爲して

程子此說_二才字_一。與_二孟子本文_一小異。蓋孟子專指_下其發_二於性_一者_上言_レ之。故以爲_二才無_二不善_一。程子兼指_下其稟_二於氣_一者_上言_レ之。則人之才。固有_二昏明清濁之不同_一矣。張子所_レ謂氣質之性是也。

二說雖殊。各有所當。然以事理考之。程子爲密。(孟子集註卷之六)

と云へり。氣質の性を知れる孟子は才の氣より發することを知らざるの理なし。然るに才の善なるを説けるは性善を説くに急なるが爲めに主として性より發する才を説きて氣より發する才を説くに及ばざりしものなるべし。以上述ぶる所に據れば伊川は一方に於ては性即理也と云ひ以て本然の性を抽象して論じ此れを以て純粹至善なるものと爲し、一方に於ては氣質の性を認め氣より發する才即ち意思の作用の節に中ると節に中らざるとあるによりて善ともなり惡ともなるものと爲せり。而し朱子の説の根據となれる主要なる點は本然の性と氣質の性とに分析したる處と性即理也と云へる處とに在り。

(七)張橫渠の性論 張橫渠も程伊川と同じく性を分つて天地之性と氣質の性と爲せり。而して氣質之性なる名は二家の用ふる所同一なれども、本性に就ては橫渠は天地之性と云ひ、伊川は性之本と云ひ理性と云ひ又反本窮源之性と云ひ一定せざりしが朱子に至りて定めて本然の性と云へり。此れより本然之性と氣質之性とは永く學者間の定名となり動かすべからざるものとなれり。橫渠の云ふ所に據れば此の天地之性は獨り人の有するのみにあらずして物も亦之を有するものとせり。故にその言に

性者萬物之一源。非有我之得專也。惟大人爲能盡其道。是故立必俱立。知必周知。愛必

兼愛。成不_レ獨成。彼自蔽塞。而不_レ知_レ順_二吾理_一者。則亦未_レ如_レ之何_一矣。(張子全書卷二、廿七頁)
と云へり。性は此の如く人物共に有するものにして宇宙の實在なる天と同體なれども、性は氣質と
共に賦與せらるゝものにして氣に通蔽開塞あるを以て人物の別を生じ、人の中に在りても亦その氣
の開蔽通塞によりて賢愚の別を生ずるを免れず。是れ横渠が

凡物莫_レ不_レ有_二是性_一。由_二通蔽開塞_一。所_二以有_二人物之別_一。由_二蔽有_二厚薄_一。故有_二知愚之別_一。塞者
牢不_レ可_レ開。厚者可_二以開_一。而開_レ之也難。薄者開_レ之也易。開則達_二於天道_一。與_二聖人一_一。

(同上卷十四、二頁)

と云へる所以にして此の説は朱子が人物の別及び賢愚の別を説く根柢となれり。横渠はかく人物賢
愚の差異を以て之を氣に歸するが故に伊川と同じく氣質の性を説いて、

形而後有_二氣質之性_一。善反_レ之則天地之性存焉。故氣質之性。君子有_二弗_レ性者_一焉。(同上卷二、
二十九頁)
と云へり。朱子之を解して曰く、

天地之性。則太極本然之妙。萬殊一本也。氣質之性。則二氣交運而生。一本而萬殊也。

(同上卷二、三十頁)

氣質。陰陽五行所_レ爲。性即太極之全體。但論_二氣質之性_一。則即此體墮在_二氣質之中_一耳。非_二別
有二_一性_一也。(同上)

横渠の説く所に據れば天地之性と氣質之性との關係明かならざれども、朱子の説明によりて氣質の性の外に天地の性あるにあらずして天地の性は氣質の性に就て抽象したるものなること明白なるを得たり。此の點に於ては朱子の説は伊川横渠の説に一步を進めたるものと謂はざるべからず。本然氣質の性に關しては伊川と横渠と何れが先きに唱へたるかを詳かにせずと雖も、朱子は此れを以て聖門に大功あるものとして口を極めて稱讚したり。その言に

氣質之説。起_ニ於張程。極有_レ功_ニ於聖門。有_レ補_ニ於後學。讀_レ之使_ニ人深有_レ感_ニ於張程。前_レ此未_ニ曾有_ニ人説_ニ到此。如_ニ韓退之原性中説_ニ三品。説得也是。但不_ニ曾分明説_ニ是氣質之性_ニ耳。性那裡有_ニ三品_ニ來。孟子説_ニ性善。但説_ニ得本原處。下面却不_ニ曾説_ニ得氣質之性。所以亦費_ニ分疏。諸子説_ニ性惡與_ニ善惡混。使_ニ張程早出。這許多説話。自不_レ用_ニ紛爭。故張程之説立。則諸子之説混矣。(朱子語類卷四、十六頁)

と云へるもの即ち是れなり。伊川及び横渠の説はもと人に本然の性と氣質の性との二性ありと謂ふにあらずして、本然の性は氣質の裡に存するものを挑出(即ち抽象)して云へるものなれば現實に在りては氣質の一性あるのみ。然るに宋儒の説を攻撃するもの宋儒の説を以て二性の存在を認めたりと云ふもの少からざれども、朱子の説出づるに及んで其の意始めて明白となれり。是れ朱子大成の功と謂はざるべからず。然るに猶云々するものあるは何が爲めなるを知らず。

以上述ぶる所は朱子性論の淵源となれる正系に屬するものなれども、其の他の傍系に屬する荀子の性惡論、楊雄の性善惡混在論、韓退之の性三品説の如きも皆朱子の大成せる性論の鎔爐中に投せられて融合混化しその痕迹を見ざるに至れり。即ち此等の諸説は皆氣質の性の中に包含せられて此に古來の諸説の正系たると傍系たるとを問はず、悉く朱子の性論の材料となり少しも矛盾す所なく統一せられたり。故に朱子は此の意味を説いて

孟子説_レ性善。他只見_レ得大本處。未_レ説_レ得氣質之性細碎處。程子謂論_レ性不_レ論_レ氣不_レ備。論_レ氣不_レ論_レ性不_レ明。二_レ之則不_レ是。孟子只論_レ性不_レ論_レ氣。便不_レ全備。荀楊韓諸人。雖_レ是論_レ性。其實只説_レ得氣。荀子只見_レ得不好人底性。便説_レ做惡。楊子見_レ半善半惡底人。便説_レ善惡混。韓子見_レ天下有_レ許多般人。所_レ以立爲_レ三品之説。就_レ三子中。韓子説又較近。他以_レ仁義禮智爲_レ性。以_レ喜怒哀樂爲_レ情。只是中間過接處。少_レ箇氣字。(朱子語類卷四、廿四頁)

と云へり。此れに據れば孟子は性を論ずれども氣質を論ずるに於て缺くる所あり。荀、楊、韓、及び明道は氣質を論ずれども性を論ずるに於て缺くる所あり。伊川、横渠は性氣合せ説くと雖も説き盡さるゝ所あり。而して能く之を大成し統一したる功に至りては朱子その人を推さざるを得ざるなり。

第六章 理 性 論

第十四節 本 然 の 性

吾人の性なる者は人生に於ける根本原理にして渾然たる一體のものなれば分別するを得べきものにあらずと雖も、朱子は程伊川及び張橫渠に本づき不雜看の上より之を分つて本然の性及び氣質の性と爲して之を考察したり。故に先づ本然の性の如何なるものなるかを論述し然る後氣質の性に及び、而してその關係を明かにすべし。

(甲)本性の定義 今朱子の所謂本然の性を考察するに朱子は程伊川の所謂性即理也の定義に本づきて性の定義を下して左の如く云へり。

性者人所_下稟_上於天_一以生_上之理也。(孟子集註卷之三)

此の定義の程伊川説に據れるは言を俟たず。易の繫辭傳に所謂一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也。及び子思の所謂天命之謂性。にも據り、又孟子の所謂口之於味也。目之於色也。耳之於聲也。鼻之於臭也。四肢之於安佚也性也。有命焉。君子不謂性也。にも據れることは前節説ける所によりて明かなるべし。然るに此の定義はその説く所簡單に過ぎてその内容を盡さざる所なきにあらず。是に於て朱子は更に此の定義の意味を説明して以爲らく、

性即理也。天以陰陽五行。化生萬物。氣以成_レ形。而理亦賦焉。猶_二命令_一也。於_レ是人物之生。因_二各得_二其所_レ賦之理。以爲_二健順五常之德。所_レ謂性也。(中庸章句第一章)

これによれば本性の如何なるものなるかの意味は明瞭に知ることを得べし。然るに朱子は更に此の解釋を敷衍してその意義を明かにせり。その言に曰く、

盖天之所_下以賦_二與萬物_一。而不_レ能_二自己_一者命也。吾之得_二乎是命_一以生。而莫_レ非_二全體_一者性也。故以_レ命言之。曰_二元亨利貞_一。而四時五行。庶類萬化。莫_レ不_二由_レ是而出_一。以_レ性言之。曰_二仁義禮智_一。而四端五典。萬物萬事之理。無_レ不_レ統_二於其間_一。盖_レ天在_レ人。雖_レ有_二性命之分_一。而其理則未_レ嘗不_レ一。在_レ人在_レ物。雖有_二氣稟之異_一。而其理則未_レ嘗不_レ同。此吾之性。所以純粹至善_一也。(中庸或問大全、六頁)

以上舉げたる朱子の性に關する定義解釋に據れば凡そ四箇の意味を含めるを認取するを得べし。

(第一) 性の根原は天即ち宇宙に於ける太極なる理に在りて、太極なる理の人に與へられたるものを性と云ふ。故に理と性とはもと同體不二なるものなり。是れ程伊川が性即理也と云へる所以にして、只宇宙に在りては之を理と云ひ人生に在りては之を性と云ふの相違あるのみ。その實相異なるものにあらざるなり。

(第二) 性は人生の根本原理にして人生に於ける一切の道理の由りて出づる根原なり。宇宙に於

ける太極なる理は所以然の理にして當然の理、必然の理、自然の理の由りて出づる根本原理なるが如く、性は人生に於ける所以然の理にして當然の理も必然の理も自然の理も皆悉く此の所以然の理の發現にあらざるなし。而して此理天に在りては元亨利貞と云ひ人に在りては仁義禮智と云ふ。宇宙に於ける四時五行萬象萬化が元亨利貞の理より出づるが如く、人生に於ける四端五典萬物萬事の理は悉く仁義禮智の理より發せざるなし。是れ性の人生の根本原理たる所以なり。

(第三) 性は人の生まるゝと共に氣質の中に存するものにして、氣質を離れて存するものにあらず。朱子が稟_二於天_一以生之理也と云ひ、又天以_二陰陽五行_一。化_二生萬物_一。氣以成_レ形。而理亦賦焉。と云へるは此の理に外ならず。蓋し吾人の形體を組織するものは即ち氣及び質にして、性は氣質形體の與へらるゝと同時に與へらるゝものなれば、氣質形體を離れて別に存するものにあらずして、氣質形體の中に存するものなり。之を稱して氣質の性と謂ふ。氣質の性は氣質形體の中に存在する本性を意味す。故に性は氣質を離れざるものなれども、氣質を雜えずして云へば氣質は氣質にして性にあらず、性は性にして氣質にあらずと謂ふを得べし。

(第四) 性は即ち理なるが故に純粹至善にして一毫の惡なし。蓋し吾人の天性は本來太極なる眞實の理の吾人に與へられたるものなれば、性それ自體純粹至善なるものにして而も人生に於ける一切の善の由りて出づる根原なり。是の故に朱子は渾然至善。未_レ嘗有_レ惡。と云ひ、此吾之性。所_二

以純粹至善一也。と云へり。然るに人の惡を爲すものあるは何に由りて然るかと云へば、朱子は人の本性は純粹至善にして一毫の惡なしと雖もその氣を通じて現はるゝや、或は氣質物欲の爲めにその節を失ふことなき能はずして惡に流るゝを免れず、故に惡は氣の活動の過不及に由りて生ずるものにして本來存するものにあらずと爲し、後天的派生的のものゝ爲せり。

以上述ぶる所は朱子の性に於ける定義の意味を悉したるものにあらずと雖もその大要は此の四箇條の意味に外ならざるべし。此れに據れば太極なる理が宇宙に於ける根本原理にして宇宙の一切を包容統一するが如く、人性も亦人生に於ける根本原理にして人生の一切を包容統一するものなるを以て性を外にして人生なしと謂ふを得べし。

(乙)本性の根原。吾人の有する性なるものは人生の根本原理なれども、その根原をいへば宇宙に於ける太極なる理の吾人に存するものなり。故に吾人の性と宇宙の太極とはもと是れ同體にして宇宙の太極は理の全體を以ていひ、吾人の性は理の部分を以て云ふの相違あるのみ。朱子が

盖合而言之。萬物統體一太極也。分而言之。一物各具一太極也。所謂天下無性外之物。而性無不在者。於是可_レ以見_レ其全_一矣。太極圖說解

萬一各正。小大有_レ定。言萬箇是一箇。一箇是萬箇。盖體統是一太極。然又一物各具_レ一太極。所謂萬一各正。猶言_レ各正性命_一也。(朱子語類卷九十四、四十四頁)

と云へるが如く太極なる理は一面より見れば萬物統體の一太極即ち全體の理なれども、一面より見れば一物各具の一太極即ち部分の理なりと謂はざるべからず。故に部分の理より云へば太極全體の理は陰陽の中にも存し五行の中にも萬化萬象の中にも存するものなりと謂はざるべからざるなり。故に朱子は吾之得_レ乎是命_レ以生。而莫_レ非_レ全體_レ者性也。と云ひ、

夫天命不_レ已。固人物之所_レ同得以生_レ者也。然豈離_レ乎人物之所_レ受。而別有_レ全體_レ哉。觀_レ人物之生々無_レ窮。則天命之流行不_レ已可_レ見矣。但其所_レ乘之氣。有_レ偏正純駁之異。是以稟而生者。有_レ人物賢否之不_レ一。物固隔_レ於氣。而不_レ能_レ知。衆人亦蔽_レ於欲。而不_レ能_レ存。是皆有_レ以自絶_レ于天。而天命之不_レ已者。初亦未_レ嘗_レ已_レ也。(朱子文集卷三十、三十頁)

と云へり。朱子の此の説はもと指_レ稟生賦形以前。爲_レ天命之全體。而人物所_レ受。皆不_レ得而與_レ焉。と云へる議論を駁したるものにして、若し全體の理の中に部分の理を容れ部分の理の中に全體の理を容るゝの理を解するものに在りては、吾人の稟受したる理は部分の理に屬すれども、此の部分の理の中に太極全體の理を包容することを知り得べし。もし宇宙に存する理は全體の理にして吾人稟受する所の理はその一片に過ぎざるものとすれば、吾人の本體は極めて不完全なるものにして、如何に修養を加ふるも宇宙の理と一體となることを得べからざるなり。性豈此の如きものならんや。吾人の性の本質より云へば此の如く性はもと宇宙に於ける太極と同一不二なるものなれども、其

の關係より云へば吾人の性は太極即ち天より命せられて與へられたるが如き感なき能はず。然るに是れ吾人に對して命令する特殊の神なるものあるにあらず。宇宙に於ける所以然の理の自然に然らしむる所を吾人の信念上より人格化して天の命令して然らしめたるものと爲せるに過ぎず。子思が天之謂性。と云ひ、易傳に繼之者善也。成之者性也と云へるは即ち此の理なり。蓋し此の理天に在りては之を命と云ひ、人に在りては之を性と云ふ、是れ天に在ると人に在るとによりてその名を異にするのみにして其の實は同一の實在なり。故に朱子は此の理を説いて

伊川言天所賦爲命。物所受爲性。理一也。自天之所賦與萬物言之。故謂之命。以人物所稟受於天言之。故謂之性。其實所從言之地頭不同耳。(朱子全書卷四十二、二頁)

天生蒸民。有物有則。只生此民一時。便已是命。他以此性了。性只是理。以其在人所稟。故謂之性。非有塊然一物。可命爲性。而不生不滅者也。蓋嘗譬之。命字如朝廷差除。性字如官守職業。故伊川先生言。天所賦爲命。物所受爲性。其理甚明。故凡古聖賢說性命。皆是就實事上說。(朱子文集卷五十九、卅頁)

と云へり。此れに據れば理と云ひ命と云ひ性と云ふは異なる所あるが如しと雖も、その實は同一の實在にして毫も異なる所あるものにあらざるの實を知り得べし。朱子は反覆此の理を論述し且天命の性の必ず氣質を須つの理を述べて以爲らく。

天命之謂性。命便是告劄之類。性便是合當做底職事。如主簿銷注。縣尉巡捕。心便是官人。氣質便是官人所習尙。或寬或猛。情便是當廳處斷事。如縣尉捉得賊。情便是發用處。性只是仁義禮智。所謂天命之與氣質亦相滾同。才有天命。便有氣質。不能相離。若闕一便主物不得。既有天命。須是有此氣。方能承當得此理。若無此氣。則此理如何頓放。(朱子語類卷四、十頁)

此れに據れば命なるものは太極即ち天と吾人との中間に存するものにして天は體に屬し命は用に屬するを以て朱子は理者天之體。命者理之用。性是人之所受。(朱子語類卷五、一頁) と云へり。命は此の如く天と性との中間の繼承關係を云ふものなれば時間的關係あるが如くなれども、其の實は只論理的關係あるのみにして時間的關係のものにあらず。かの易傳に言ふ所亦然り。一陰一陽之謂道と云へる道は所以然の理にして太極を意味することは既に前に述ぶる所の如し。而して繼之者善也は天道の流行にして命なることを意味し天と人との中間に在り、此の命によりて吾人に賦與せられたるもの即ち性なり。故に成之者性也と云へり。纔に性と云へば此の理墮ちて氣質の中に在るを以て氣質を離れて性を見るべからず。故に朱子は亦此の易傳に就ても同一の解釋を爲して、

繼之者善。方是天理流行之初。人物所資以始。成之者性。則此理各自有箇安頓處。故爲人爲物。或昏或明方是定。若是未有形質。則此性是天地之理。如何把作人物之性。

得。(朱子語類卷七十四、廿四頁)

と云へり。既に屢々云へるが如く理と氣とはもと分離するを得べからざるものにして、理あれば必ず氣あり氣あれば必ず理あるは宇宙の原則なれば性は氣質形體と共に賦與せらるゝものなり。是れ朱子が又天以陰陽五行。化生萬物。氣以成形。而理亦賦焉と云ひ、蓋天之所_下以賦與萬物。而不能_レ自己_レ者命也。吾之得_レ乎是命_レ以生。而莫_レ非_レ全體者性也。(皆見_レ上文)と云へる所以にして理氣相須つの意を見るべきなり。然るに朱子は理氣の關係を説明するに當りては、太極なる理ありて方に始めて陰陽あるものとして理先氣後の説を爲すにも拘はらず、性氣の關係を論ずるに當りては氣以て形を成して理も亦賦すと云ひ、以て氣先理後の説を爲すものは如何なる理に由りて然るか。是れ一は太極全體の理に就て本體を主として流行發展する次第を云ひ、一は太極部分の理に就て現象を主として賦與稟受の次第を云へるものにして、皆理氣を分別して強いてその次第先後を説けるものなれば不雜看と同じく吾人の觀念に屬する問題なり。然るに不離看より云へば理と氣とは分離すべからざるものにして、宇宙に在りても人生に在りても朱子の所謂有則俱有にて決してその次第先後を分つを得べきものにあらず。朱子が

論_レ本原_レ則有_レ理然後有_レ氣。若論_レ稟賦_レ則有_レ是氣_レ而後理隨_レ以具。故有_レ是氣_レ則有_レ是理_レ。無_レ是氣_レ則無_レ是理_レ。(中庸大全、四頁引)

と云へるは即ち此の理を説けるなり。故に朱子が或は理先氣後を説き或は氣先理後を説くも、もとは是れ本原より論ずると稟賦より論ずるとの相異によるものにして決して矛盾するものにあらず。

太極は生々の理にして宇宙に於ける生々發展の原理なり。而して生々の理はもと渾然一體なるものにして、分析するを得べきものにあらざれども強いてその徳を分析すれば四箇と爲すを得べし。元亨利貞即ち是れなり。元は生々の理の始、亨は生々の理の通、利は生々の理の遂、貞は生々の理の成なり、然るに理と氣とは本來相離るゝを得べからざるものなれば、又此れを以て生々の氣の始めて生ずるを元と爲し、生々の氣の充滿流通して至らざる所なきを亨と爲し、生々の氣の發展の遂げられて其の宜しきを得るを利と爲し、又生々の氣の發展の完成せられたるを貞と爲すを得べし。而して生々の理たる元亨利貞の人に與へられたるものは即ち仁義禮智にして、元は即ち仁となり亨は即ち禮となり利貞は即ち義智となるものなれば、宇宙に於ける元亨利貞の徳と吾人の仁義禮智の徳とはもと同體不二と謂ふを得べし。故に朱子は此の理を説いて

吉甫問_三性與_三天道。曰。譬如_三一條長連底物事。其流行者是天道。人得_レ之者爲_レ性。乾之元亨利貞天道也。人得_レ之則爲_三仁義禮智之性。(朱子語類卷二十八、十六頁)

性以下賦_三於我_二之分_上而言。天以_三公共道理_二而言。天便是脫模是一箇大底人。人便是一箇小底天。吾之仁義禮智。即天之元亨利貞。凡吾之所_レ有者。皆自_レ彼而來也。故知_三吾性_二。則自然知

天矣。(同卷六十、六頁)

仁義禮智。便是元亨利貞。仁義禮智。似一箇包子。裏面合下都具了。一理渾然。非有先後。元亨利貞便是如此。不_レ是說_二道有_二元之時_一。有_レ亨之時_甲。(同上卷六十八、七頁)

と云へり。而して朱子は更に天道に於ける元亨利貞の人に與へられて仁義禮智の徳となれることを氣の上より説明して以爲らく、

元者生物之始。天地之徳。莫_レ先_二於此_一。故於_レ時爲_レ春。於_レ人爲_レ仁。而衆善之長也。亨者生物之通。物至_二於此_一。莫_レ不_二嘉美_一。故爲_レ時爲_レ夏。於_レ人爲_レ禮。而衆美之會也。利者生物之遂。

物各得_レ宜。不_二相妨害_一。故於_レ時爲_レ秋。於_レ人爲_レ義。而得_二其分之利_一。貞者生物之成。實理具備。隨_レ在各足。故於_レ時爲_レ冬。於_レ人則爲_レ智。(周易本義通釋卷七、一頁)

此れに據れば元亨利貞の徳の人に在りて仁義禮智の四徳となるのみならず、善美利正の四徳も亦元亨利貞の徳に外ならざると共に仁義禮智の徳に外ならざることを知り得べきなり。之を要するに元亨利貞は宇宙に於ける全體の理にしてその人に與へられて仁義禮智となるや、仁義禮智は人性に於ける全體の理なれば、天に在ると人に在るとの相違あれども、その本體に於ては同一不二なりと謂はざるべからず。本性の人に在る既に全體の理なれば人生に於ける一切の理はすべて此の理の中に包含せらる。故に此れによりて發して四端萬善の現象となること復た論を俟たずして明かなり。

(丙)本性の内容。程朱が性を定義して性卽理也と云へるを見るに二箇の意味あるが如し。即ち(一)は性の根原の宇宙に於ける太極なる理に在ることを明かにしたるものにして、(二)は性の本質が氣にあらずして人生の根本原理たることを明かにしたるものと謂ふを得べきなり。然るに性の根原に就ては既に之を明かにしたれば、此れより更に性の本質内容の如何を明かにせざるべからず。前に述べたるが如く朱子は周濂溪の思想に本づき太極を以て無形無象にして形容を絶し思議を絶つものなれども、その中に理の存在を否定すべからずと爲して、蓋其所謂太極云者。合天地萬物之理。而一名之耳。以下其無器與形。而天地萬物之理。無不在是。故曰無極而太極。(文集卷七十八)と云へり。故に太極なる理と同一體たる人性に就ても亦太極と同様に見て無形無象にして形容思議を容れざるものとして、

蓋原此理之所自來。雖極微妙。然其實只是人心之中。許多合當做底道理而已。但推其本。則見其出於人心。而非人力之所能爲。故曰天命。雖萬事萬化皆自其中流出。而實無形象之可指。故曰無極耳。(朱子文集卷四十五、四十六頁)

論性要須先識得性是箇甚麼物事。程子性卽理也。此說最好。今且以理言之。畢竟却無形影。只是這一箇道理在人。仁義禮智性也。然四者有無何形狀。亦只是有如此道理。有如此道理。便做得許多事出來。所以能惻隱羞惡辭讓是非也。譬如論藥性。性寒性熱之類。

藥上亦無_下討_上這形狀一處。只是服了後。却做_得冷。做_得熱。底便是。(朱子語類卷四、九頁)

と云へり。此れに據れば性は即ち無極の理にして何等形影の見るべきものなく聲臭の聞くべきものなき理なりと雖も、その發して惻隱羞惡辭讓是非の如き現象的理となりて現はれたる所より之を推せば、その根柢に仁義禮智の性即ち理の存することを知り得べきなり。吾人の性は本來渾然一體のものなれば之を分つて仁義禮智の四箇と爲すべきものにあらず。然るに仁義禮智と爲したるは現象に現はれたる所に惻隱羞惡辭讓是非の四箇の理あるより推定したるものと謂はざるべからず。朱子は更に演釋的に此の理を説いて以爲らく、

蓋人生而靜。四德具焉。曰仁。曰義。曰禮。曰智。皆根_ニ於心_一而未_レ發。所_レ謂理也。性之德也。及_ニ其發見_一。則仁者惻隱。義者羞惡。禮者恭敬。智者是非。各因_ニ其體_一。以見_ニ其本_一。所_レ謂情也。是皆人性之所_ニ以爲_レ善者也。(朱子文集卷三十二、十九頁)

朱子は孟子に本づき性の徳を分つて仁義禮智の四箇と爲すこと多げども、或は漢儒及び韓退之の説に據りて仁義禮智信の五徳と爲すことなきにあらず。今その言を擧げんに、

大凡天之生物。各付_ニ一性_一。性非_レ有_レ物。只是一箇道理之在_レ我者耳。故性之所_ニ以爲_レ體。只是仁義禮智信五字。天下道理。不_レ出_ニ於此_一。韓文公云。人之所_ニ以爲_レ性者五。其說最爲_レ得_レ之。五者之中所_レ謂信者。是箇真實無_レ妄底道理。如_ニ仁義禮智_一。皆真實而無_レ妄者也。故信字更不_レ

須レ説。(同上卷七十四、廿頁)

と云へるもの即ち是れなり。此の説は朱子が漢儒及び周濂溪の五行説を取り、木火土金水の中の土を以て木火金水のすべてに關するものと解したると同一の見解にして、五行説を採用する以上はかく説かざるを得ずと雖も、稍牽強の嫌なきや否や考察を要すべき問題たるを失はず。以上述ぶる所に據れば吾人の性には本來仁義禮智の四徳(或は仁義禮智信の五徳)を具有するを以て仁の徳は發して惻隱の情となりて現はれ、義の徳は發して羞惡の情となりて現はれ、禮智の徳は發して辭讓是非の情となりて現はるゝものにして、孟子は之を歸納的に惻隱羞惡辭讓是非の情より溯りて之を仁義禮智の四徳の存在に歸したるに過ぎず。然るに此の仁義禮智の四徳は惻隱羞惡辭讓是非の現象的理法となりて現はるゝのみならず。更に種々の實行的現象理法となりて現はるゝものなり。故に朱子は又、

蓋天命之性。仁義禮智而已。循_二其仁之性。則自_二父子之親。以至_二於仁_レ民愛_レ物。皆道也。循_二其義之性。則自_二君臣之分。以至_二敬_レ長尊_レ賢。亦道也。循_二其禮之性。則恭敬辭讓之節文皆道也。循_二其智之性。則是非邪正之分別亦道也。蓋所_レ謂性者。無_二一理之不_レ具。故道者不_レ待_二外求。而無_レ所_レ不備。所_レ謂性無_二一物之不_レ得。故道者不_レ假_二人爲。而無_レ所_レ不周。可_四以見_二天命之本然初無_二間隔。而所_レ謂道者。未_二嘗不_レ在_レ是也。是豈有_レ待_二於人爲。而豈人之所_レ得_レ爲

哉。(中庸或問大全、十一頁)

と云へり。是れ子思の所謂率_レ性之謂_レ道を説けるものにして性は人生に於ける所以然の理なれば人生に於ける一切の理は皆此れに本づいて發せざるものなく、驚天動地の大事業と雖も亦皆性の發現に外ならず。朱子が性者無_二一理之不_レ具。故道者不_レ待_二外求。而無_レ所_レ不_レ備と云へるは即ち此の理を説けるなり。而して朱子又此の理を述べて曰く、

天命之性。只以_二仁義禮智四字_一言之。最爲_二端的。率_レ性之道。便是率_二此之性。無_レ非_二是道。亦離_二此四字_一不_レ得。如_レ程子所謂仁性也。孝悌用也。性中只有_二仁義禮智。而曷嘗有_二孝弟_一來_上。此語亦可_レ見矣。蓋父子之親。兄弟之愛。固性之所_レ有。然在_二性中。只謂_二之仁。而不_レ謂_二之父子兄弟之道_一也。君臣之分。朋友之交。亦性之所_レ有。然在_二性中。只謂_二之義。而不_レ謂_二君臣朋友之道_一也。推_レ此言之。曰_レ禮。曰_レ智。無_二不_レ然者。蓋天地萬物之理。無_レ不_レ出_二於此四者。 (朱子文集卷四十二、八頁)

然るに仁義禮智に本體より云へるものと作用より云へるものとあり。本體より云へば仁は性にして根本原理なれば孝悌の如き忠信の如き現象上の理はその性中に存すと雖も未だ發し來らざるを以て性中只有_二仁義禮智。曷嘗有_二孝弟_一來と云ふを得べきなり。然れども作用よりいへば仁は是れ愛にして近きは父子の愛より天下社會の人を愛するに至るまで皆仁愛の道に外ならず。故に仁愛の道は

孝悌を以て本と爲すと謂ふを得べし。是れ有子が君子務_レ本。本立而道生。孝弟也者。其爲_レ仁之本與。と云へる所以にして、朱子が之を解して

仁是性。孝弟是用。用便是情。情是發出來底。論_レ性則以_レ仁爲_レ孝弟之本。論_レ行_レ仁則孝弟爲_レ仁之本。如_レ親_レ親仁_レ民愛_レ物。皆是行_レ仁底事。但須_レ先從_レ孝弟_レ做起_上。舍_レ此便不_レ是本。

(朱子語類卷二十、廿八頁)

と云へるは此の意を説けるに外ならず。之を要するに性なるものは即ち理にして理を外にして性あるなし。而して性はもと渾然たる一理なれども之を分てば仁義禮智の四箇と爲すを得べくして、此の裏に現象の理となるべきものを悉く包容するを以て發して惻隱羞惡辭讓是非の情となり、君臣の義父子の親夫婦の別長幼の序朋友の信となり更に萬理萬善の行爲となるを得べくして、能く人の性を盡し物の理を盡し天地の化育を賛して天地位し萬物育するに至ると雖も、亦此の理の發現に外ならざるものと謂ふべきなり。

第十五節 本性の善

(一)本性の至善。人性の善なるか悪なるかの問題は孟子以後に於ける學者の間に於て盛んに論ぜられ、今日に至りても未だ論じ盡されざるが如きの觀あり。此れに就て朱子は如何なる見解を有せしかを考察せざるべからず。朱子の説に據れば宇宙に於ける所以然の理なる太極は眞實無妄の理な

ると共に純粹至善の理にして、此の二者はもと同一體の理なるをその見る所によりて或は眞實無妄の理と云ひ或は純粹至善の理と云ふものなれば、その實相異なるものにあらず。故に朱子の言に

誠者至實而無妄之謂。卽所謂太極也。(通書解第一章)

太極只是箇極好至善底道理。人々有_二一太極。物々有_二一太極。周子所謂太極是天地人物。萬善至好底表德。(朱子語類卷九十四、一頁)

とあり。然るに吾人の有する性は宇宙に於ける太極なる理の人に與へられたるものなれば、太極なる理の眞實無妄にして純粹至善なるが如く、吾人に存する性の徳も亦眞實無妄の理たると共に純粹至善なるものと謂はざるべからず。朱子が周子の誠無爲を解して實理自然。何爲之有。卽太極也。と云ひ又

誠實理也。無爲猶_二寂然不動_一也。實理該_二貫動靜_一。而其本體則無爲也。誠無爲則善而已。動而有_レ爲。則有_レ善有_レ惡。(周子全書卷七、十六頁)

と云へるを見れば以て人性の誠なると共に善なることを知り得べきなり。然るに人性の誠と云ひ善と云ふは如何なる意味なるかに就て朱子の説を考察せざるべからず。朱子が誠の字に就て定義を與へて誠者至實而無妄之謂也と云ひ、又姑以_二其名義言_レ之。則眞實無妄之云也。若_二事理之得_二此名_一。則亦隨_二其所_レ指之大小_一。而皆有_レ取_二乎眞實無妄之意_一耳。(中庸或問大全)と云へるに據れば、宇宙及

び人生の根本原理たる性も太極と同じく眞實の理にして一毫の虚妄なきものなり。故に天道に就て云へば天道の流行するや古より今に至るまで一毫の妄なく、暑往けば寒來り日往けば月來り春生し了れば夏長じ秋殺し了れば冬藏し、元亨利貞の終始循環するもの皆是れ眞實の道理之が主宰たるに由る。人生に就て云へば此の實理人に賦與せられて自然に發現す。かの孩提の童の親を愛し兄を敬するを知らざるなきは是れ實理の發見する所にして乍ら孺子の將に井に入らんとするを見て怵惕隱の心の起るは亦眞實の理の自然に發露する所と謂はざるべからず。故に朱子は此の理を説いて

蓋以_二自然之理_一言之。則天地之間。惟天理爲_二至實而無妄_一。故天理得_二誠之名_一。若_二所謂_一謂天之道。鬼神之德_一是也。以_レ德言_レ之。則有生之類。惟聖人之心。爲_二至實而無妄_一。故聖人得_二誠之名_一。若_二所謂_一謂不_レ勉而中。不_レ思而得者_一是也。至_二於隨_レ事而言_一。則一念之實亦誠也。一言之實亦誠也。一行之實亦誠也。是其大小雖_レ有_レ不_レ同。然其義之所_レ歸。則未_二始不_レ在_二於實_一也。

(中庸或問大全、一百二頁)

と云へり。此れに由りて之を觀れば宇宙に存する眞實無妄の理と吾人に存する眞實無妄の理とはもど同一體のものにして、聖凡を問はず普遍的に與へられたるものなれども、聖人はその氣質清純なるを以て渾然たる天理初めより人欲の爲めに害せらるゝことなければ、仁は表裏皆仁にして一毫の不仁なく義は表裏皆義にして一毫の不義なく、其の徳たるや天下の善を擧げて一事も遺すことなく

其の善たるや又天下の實を極めて一毫も満たさざることなし。然るに常人は氣稟物欲の爲めに昏蔽せらるゝを以て眞實の理を失ひ、その惻隱の發するに當りて利害の念之に雜はりて仁たる所以のもの眞實ならず。その羞惡の發するに當りて貪味の念之に雜はりて義たる所以のもの眞實ならざることあるを免れず。是れ聖凡の相違を生ずる所以なり。故に曰く

以_レ理言_レ之。則天地之理。至實而無_二一息之妄。故自_レ古及_レ今。無_二一物之不_レ實。而一物之中。自_レ始至_レ終。皆實理之所_レ爲也。以_レ心言_レ之。則聖人之心。亦至實而無_二一息之妄。故從_レ生至_レ死。無_二一事之不_レ實。而一事之中。自_レ始至_レ終。皆實心之所_レ爲也。(中庸或問大金、百十七頁)

以上述ぶる所は主として眞實無妄の理の發現したる所に就ていへるものなれども、宇宙に在りても吾人に在りても本來眞實無妄の理を具有するが故に能くその理の發現を見るを得べきなり。

然らば善とは如何。朱子は善に就ては未だ嘗て之が定義を下したることなきを以てその意知るべからず。蓋し朱子に在りては、善は自明の理なるを以て定義を立つる必要を認めざりしものなるべし。然れども今日に在りては定義の必要なしと謂ふべからず。余の見る所を以てすれば善とは其の物の本質を云へるものにして、その物自體の純粹にして圓滿完全なるを謂へるなり。仁義禮智を以て善なりと云ふは仁義禮智なる徳それ自體の純粹圓滿完全にして一毫の惡の存せざることの意味するものならざるべからず。朱子が性善の意を解して、

性者人所_下稟_ニ於天_一以生_上之理也。渾然至善。未_ニ嘗有_レ惡_一。(孟子集註卷之三)

本然之性。固渾然至善。不_ニ與_レ惡對_一。此天之賦_ニ與我_一者然也。(朱子語類卷一百一、卅二頁)

と云へるは即ち此の意に外ならず。而して善は獨り體の上より謂ふのみにあらず用の上に就ても亦云ふを得べし。即ち惻隱羞惡辭讓是非の情の本質の圓滿完全にしてその發用の節に中るものを善と謂ふが如きは是れなり。故に發用上より云ふときは節に中ると節に中らざるとによりて善惡を決し得べくして、節に中るものは善にして節に中らざるものは惡なりと謂はざるべからず。故に朱子は

所謂靜者。亦指_ニ未_レ感時_一言爾。當_ニ此之時_一。心之所_レ存。渾是天理。未_レ有_ニ人欲之僞_一。故曰_ニ天之性_一。及_ニ其感_レ物而動_一。則是非眞妄。自_レ此分矣。然非_レ性則亦無_ニ自而發_一。故曰_ニ性之欲_一。而其是非眞妄。特決_ニ於有_レ節與_レ無_レ節_一。中_レ節與_レ不_レ中_レ節之間_一耳。(朱子文集卷四十二、五頁)

と云へり。蓋し體の上にて云ふ所の善と用の上にて云ふ所の善とはもと同一體のものにして體の善は即ち用の善、用の善は即ち體の善ならざるべからず。然るに性はもと渾然たる一理にして形象の見るべきものなく聲臭の聞くべきものなければ、善と云ふべきものなきが如しと雖も、その發現したる情に就て之を見れば惻隱羞惡辭讓是非の如き認め得べき善なるものあれば、現象の善より推せば本體の善を知り得べからざるにあらず。是れ性を以て善なりと謂ふ所以にして孟子が乃若_ニ其情_一。則可_ニ以爲_レ善矣_一。乃所謂善也。と云へるは此の意に外ならず。是れ猶水の下流の清きを見てその

本源の清きを知るが如し。惻隱の心の發見を見ればその本源に仁あるを知り得べく、羞惡の心の發見を見ればその本源に義あるを知り得べく、辭讓是非の心の發見を見ればその本源に禮智あるを知り得べし。故に孟子の性善を云へるは即ち下流より本源に溯りて推定するものにして朱子は全く此の說に従へるなり。故にその言に曰く

性則理而已矣。何言語之可形容哉。故善言性者。不過即其發見之端而言之。而性之韞。固可默識矣。如孟子言四端是也。觀水之流而必下。則水之性下可知。觀性之發而必善。則性之韞善。亦可知也。(朱子語類卷九十五、十七頁)

性は太極渾然之體。本不可下以名字言。但其中含_レ有萬理。而綱理之大有_レ四。故命之曰_レ仁義禮智。四端之未_レ發也。所謂渾然全體。無_レ聲臭之可言。無_レ形象之可見。何以知其祭然有_レ條如_レ此。蓋是理之可_レ驗。乃依然就_レ他發處_レ驗得。凡物有_レ本根。性之理雖_レ無_レ形。而端的之發最可_レ驗。故由_レ其惻隱。所以必知_レ其有_レ仁。由_レ其羞惡。所以必知_レ其有_レ義。由_レ其恭敬。所以必知_レ其有_レ禮。由_レ其是非。所以必知_レ其有_レ智。使_レ其本無_レ是_レ理於內。何以有_レ是_レ端於外。由_レ其有_レ是_レ端於外。所以必知_レ有_レ是_レ理於內。不可_レ誣也。故孟子言乃若_レ其情。則可以爲_レ善矣。乃所謂善也。是則孟子之言_レ性善。蓋亦迺_レ其情。而逆知_レ之耳。(朱子文集卷五十八、廿三頁)

然らば朱子の所謂善は孟子の所謂善と同じく現象上に就て云へるものなれば、相對的善を意味する

こと明かなり。故に朱子の説は四端の發見の善なる所より推して性の純粹至善なることを知るものにして、性の純粹至善の外に四端の善あることなく、又四端の善の外に性の純粹至善なるものあることなしと謂はざるべからず。朱子が善の相對なるを明かにして

善惡也。眞妄也。動靜也。一先一後。一彼一此。皆以_レ對待_一而得_レ名者也。不_レ與_レ惡對_一。則不_レ名爲_レ善。不_レ與_レ動對_一。則不_レ名爲_レ靜矣。既非_レ妄又非_レ眞。則無_レ物之可_レ指矣。今不_レ知_下性之善而未_レ始有_レ惡也。眞而未_レ始有_レ妄也。主_三乎靜而涵_中乎動也。顧曰_レ善惡眞妄動靜。凡有_二對待_一。皆不可_レ以言_レ性。而對待之外。別有_二無對之善與_レ靜焉_一。然後可_レ以形_レ容天性之妙_也。不_レ亦異_二乎_一。(朱子文集卷七十五、廿六頁)

と云へるは此の意に外ならず。朱子が善を以て善惡相對的のものと爲したるは、靜を以て動靜相對的のものと爲して絶對的靜なるものを認めず、動靜二字。相_二爲對待_一。不_レ能_レ相無_一。乃天理之自然。非_三人力之所_二能爲_一也。若_{不_レ與_レ動對_一。則不_レ名爲_レ靜。不_レ與_レ靜對_一。則亦不_レ名爲_レ動矣。(文集卷四十二、二頁)と云へると同一の旨意より出づ。朱子は已に善を以て現象上より云ふものとなしたるを以て之を相對的のものとしたること此の如くなれども、性の渾然たる純粹至善とはもと同一にして現象の相對的善も畢竟至善の發現したるものに外ならずとせり。蓋し本體の性は渾然至善。未_レ嘗有_レ惡ものなれば惡の對すべきものなれども、已に現象に現はれ來りては人欲の私によりて惡を生}

することあるを免れず。故に相對的ならざるを得ざるなり。その言に、

問。孟子言性。何必於其已發處言性之。曰。未發是性。已發是善。(朱子語類卷五十五、二頁)

問。先生謂性是未發。善是已發。何也。曰。纔成箇人影子。許多道理。便都在那人上。其側

隱便是仁之善。羞惡是義之善。到動極復靜處。依舊只是理。(朱子語類卷五、二頁)

と云へるものは是れなり。此れに據れば發見の善の相對的善なることは復た疑を容れざる所なり。然るに此の情の相絶的善と性の渾然至善なるものは決して各別のものにあらずして至善の發現したるもの即ち相對的善なるなり。

以上述べたる性の至善及び相對善は性の動靜未發已發に關する問題なれば此こにその理を明にすべき必要あり。蓋し宇宙に於ける太極は動靜する所以の理にしてその中に動靜を包涵す。故以本體而言。謂太極包動靜則可。の言あり。性はもと太極の人に存するものなれば、太極と同じく動靜する所以の理にして動靜を包涵するものなりと謂はざるべからず。然るに朱子が

太極自是涵動靜之理。却不_下可_下以_下動靜_分體用上。蓋靜即太極之體也。動即太極之用也。

(朱子語類卷九十四、八頁)

梁文叔云。太極兼動靜而言。曰不_是兼動靜。太極有動靜。喜怒哀樂未_レ發。也有_二箇太極。一(按太極即性之意)喜怒哀樂已發。也有_二箇太極。只是一箇太極。流_行於已發之際。斂_藏於未

發之時。(同上卷九十四、八頁)

と云へるが如く性も亦同じく動靜は性にあらずして氣の作用に屬するものなれども、心の寂然不動にして靜なるは即ち性の體にして心の物に感じて動くは即ち性の用と謂はざるべからず。故に或は心の寂然不動にして靜なるを直に性と云ひ心の物に感じて動くを情と云ふことあり。朱子がその門人胡廣仲に答へて、

所謂靜者。亦指未感時言爾。當此之時。心之所存。渾是天理。未有人欲之僞。故曰天之性。及其感物而動。則是非真妄。自此分矣。然非性則亦無自而發。故曰性之欲。動字與中庸發字無異。而其是非真妄。特決於有節與無節。中節與不中節之間耳。至謂靜字所以形容天性之妙。不可動靜真妄言。則熹却有疑焉。蓋性無不該。動靜之理具焉。若專以靜字形容。則反偏却性字矣。記以靜爲天性。只謂未感物之前。私欲未萌。渾是天理耳。不必以靜字爲性之妙也。真妄又與動靜不同。性之爲性。天下莫不具焉。但無妄耳。今乃欲下并與其真而無之。此韓公道無真假之言。所以見譏於明道也。伊川所謂其本真而靜者。真靜兩字亦自不同。蓋真則指本體而言。靜則但言其初未感物耳。明道先生云。人生而靜之上不容說。纔說性時。便已不是性矣。蓋人生而靜。只是情之未發。但於此可見天性之全。非真以靜狀性也。(朱子文集卷四十二、五頁及六頁)

と云へるもの即ち是れなり。此の朱子の言に據れば性は吾人の實在なればすべての理を該ねざる所なく所謂動靜を包涵し動靜悉く性より出づること、太極が動靜を包涵し動靜悉く太極の顯現にあらざることなきと同一なり。而して朱子が靜を以て太極の體と爲し動を以て太極の用と爲せるを性の上に移して云へば靜は性の體にして動は性の用と謂ふを得べし。故に動靜相對して云ふときは性の靜なる體ありて性の動なる用あり。而して性は此の動靜を具有するものと謂はざるを得ず。然れども性を以て未發の靜と爲し心を以て已發の用と爲すは朱子中年未定の說にして誤謬たるを免れず。故に朱子も亦此れを以て謬となし而して吳竹如も朱子の太極自是涵動靜之理。却不_下以_二動靜_一分_レ體用上と云へるに對して、

夫以_二動靜_一分_二體用上。原未_二嘗錯_一。而朱子謂爲_二不可_一者。蓋朱子早年從_二南軒先生未發說_一。未發爲_二太極_一。屬_レ靜屬_レ體。其發時自有_二一未發者_一。常主_二於中_一。而有_二以_レ理爲_レ靜爲_レ體。以_レ氣爲_レ動爲_レ用之弊。故又曰性爲_二未發_一。心爲_二已發_一。卽此意也。迨_レ悟_二中和舊說之非_一。故示_レ人_二以下太極涵_二動靜_一之理。而曰_レ不_レ可_下以_二動靜_一分_レ體用上者。謂_レ不_レ可_下以_レ理爲_レ靜。以_レ氣爲_レ動。而分_レ體用上所_二以直接云_二靜卽太極之體。動卽太極之用_一也。(拙修集卷三、九頁)

と云へり。吳竹如が朱子の爲めに辯明する所は正確動かすべからざるものにして此の理は亦以て性理にも移して云ふことを得べきものなれば、性は動靜を包涵して寂然不動未發の體も感而遂通已發

の情も皆包涵するものならざるべからず。故に仁義禮智の如き寂然不動未發の體は性の有する所に
して、惻隱羞惡辭讓是非の如き感而遂通已發の情も亦性の發現したるものなれば、仁義禮義は性の
性にして惻隱羞惡辭讓是非は性の情と云ふべく、情亦性を外にして存するものならざるなり。是
れ情の善によりて性の善なるを知るべきにあらずや。以上述ぶる所は主として性の動靜未發已發に
就て云へるものなれども、朱子が所謂靜者亦指_レ未_レ感時_二言爾_一。當_レ此之時_一。心之所_レ存。渾是天理。
未_レ有_二人欲之私_一。と云ひ、又及_二其感_レ物而動_一。則是非眞妄自_レ此分矣と云へる所を見れば、その説
は亦人性の善惡に就ても云へるを知るべし。即ち心の未だ物に感せず未發なる時は天理そのまゝに
して人欲の私なきを以て純粹至善にして且眞實無妄なり。然るに物に感じて動くに及んでその動く
所節に中れば善なれども節に中らざれば惡となるべし。朱子が性を善なりと云へるは此の已發の動
の節に中りて善なる所より推して未發の靜に及ぼし、未發の靜も亦同じく善なるものと爲せるなり。
更にいへば用の善より溯りて體に推及し體をも純粹至善なるものと爲せるを以て、已發の用に就て
云へる善と未發の體に就て云へる善とは同一にして、未發の體の善發して已發の用の善となるもの
と謂はざるべからず。故に朱子は

性善之善。非_二善惡之善_一。某竊謂極_レ本窮_レ原之善。與_二善惡末流之善_一。非_レ有_二二也_一。但以_二其發
與_二未發_一言_レ之。有_レ不_レ同耳。蓋未發之善。只有_二此善_一。而其發爲_二善惡之善_一者。亦此善也。既

發之後。乃有不善以雜焉。而其所謂善者。卽極本窮原之發耳。(朱子文集卷三十七、卅二頁)

と云へり。以て朱子の意の在る所を知るべきなり。朱子が特に未發之善と已發之善と同一の意味なることを明かにしたるものは當時行はれたる胡五峰の説の誤謬を駁したるものなれば、更に胡五峰の説を擧げて論せざるべからず。

(二)無善無惡説。胡五峰は孟子の所謂性善を以て贊嘆之辭と爲し、又性を以て天地鬼神の奥と爲し、且性を以て善とも惡とも云ふべからずして善惡を超越したる無善無惡のものとせり。故にその説に

或問性。曰性也者天地之所以立也。然則孟軻氏、荀卿氏、楊雄氏之以善惡言性也非歟。

曰性也者天地鬼神之奧也。善不足以言之。况惡乎哉。或又曰何謂也。曰宏聞之先君子。曰

孟子所以獨立諸儒之表者。以其知性也。宏請曰。何謂也。先君子曰。孟子道性善云者。

歎美之詞。不與惡對。(朱子文集卷七十三、四十七頁引)

と云へり。而して此の説は胡五峰之を其の父胡文定(卽胡安國)に得、胡文定は之を楊龜山に得、楊龜山は之を東林寺の僧常總に得たるものにして、流傳の間遂に本意を失ひたるものありと云ふ。朱子その傳來を説いて

胡文定又得於龜山。龜山得之東林常總。龜山鄉人。與之往來。後任廬山東林。龜山赴

省。又往見之。總極聰明。深通佛書。有_二道行_一。龜山問孟子道_二性善_一。說得是否。總曰。是。又問性豈可_下以_二善惡_一言_上。總曰。「本然之性。不_二與_一惡對。」此語流傳自_レ他。然總之言。本亦未_レ有病。蓋本然之性。是本無_二惡_一。及_レ至_二文定_一。遂以_レ性爲_二贊歎之辭_一。到_二得致堂_一（胡寅、五峰之兄）五峰輩。遂分成_二兩截_一。說_二善底不_二是性_一。若善底非_二本然之性_一。却那處得_二這善_一來。既曰贊_二歎性好_一之辭。便是性矣。若非_二性善_一。何贊歎之有。如_二佛言_二善哉善哉_一。爲_二贊美之辭_一。亦是說_二這箇道理_一好。所以贊_二歎之_一也。（朱子語類卷一百一、卅二頁）

と云へるもの即ち是れなり。而して朱子が此の説に對して否定する所は何れの點に在りやと云へば（一）性を以て無善無惡のものと爲すこと、（二）性善の善を以て其の尊比なきものと爲し相對の善と區別することの二點に在るものゝ如し。此の二點に對する朱子の駁論を見るに左の如し。

知言固有_二好處_一。然亦大有_二差失_一。如_レ論_レ性却曰。不_レ可_下以_二善惡_一辨_上。不_レ可_下以_二是非_一分_上。既無_二善惡_一。又無_二是非_一。則是告子湍水之說爾。（同上卷一百一、卅四頁）

蓋謂_二天命_一爲_レ不_レ圍_二於物_一可也。以爲_レ不_レ圍_二於善_一。則不_レ知_二天之所_一以爲_レ天矣。謂_二惡不_レ可_一以言_レ性可也。以爲_二善不_レ足_一以言_レ性。則不_レ知_二善之所_一自來_一矣。知言中此等議論與_二其他好處_一。自相矛盾者極多。却與_二告子楊子釋氏蘇氏之言_一。幾無_二以異_一。（朱子文集卷四十二、五頁）

胡五峰が性也者天地鬼神之奧也。善不_レ足_二以言_レ之_一之況惡乎。と云へる所に據れば性は絶對的のもの

にして善とも言ふべからず惡とも言ふべからず全く善惡を超越したるものとなるべし。故に此の説は畢竟無善無惡説に陥りて告子蘇氏及び釋氏と同一思想となり儒學本來の説にあらざるなり。此の説に據れば吾人本然の性なるものはもと冲漠無眚にして全然空無のものなれば、その體たるや虚靜にして寂然不動未發的なり。故にその中には善も存せず惡も存せざれば善を以て名づくべからず況んや惡を以て名づくべきものにあらずして所謂善惡を超越する絶對的のものとなすべからずと云ふに在りて、絶對的善と相對的善とを區別して相對的善は絶對的善と同一のものにあらずと爲せり。朱子が此の説を排斥して取らざりしものは、蓋しかく絶對的善と相對的善とを區別して關係なきものとすれば二元論となるの傾向あること、その説が告子及び佛説に本づき儒學本來の思想に反することの二點に在りしが如し。故に朱子は又

胡季隨主其家學一説。性不可_レ以_レ善言。本然之善。本自無_レ對。才說_レ善時。便與_レ那惡對矣。才說_レ善惡。便非_レ本然之性矣。本然之性。是上面一箇。其尊無_レ比。善是下面底。才說_レ善時。便與_レ惡對。非_レ本然之性矣。孟子道_レ性善。非_レ是說_レ性之善。只是贊歎之辭。說_レ好箇性。如_レ佛言_レ善哉。某嘗辨_レ之云。本然之性。固渾然至善。不_レ與_レ惡對。此天之賦_レ予我_レ者然也。然行之在_レ人。則有_レ善有_レ惡。做_レ得是_レ者爲_レ善。做_レ得不是_レ者爲_レ惡。豈可_レ謂_レ善者非_レ本然之性。只是行_レ於人_レ者。有_レ二者之異。然行_レ得善_レ者。便是那本然之性也。若如_レ其言。有_レ本然之善。

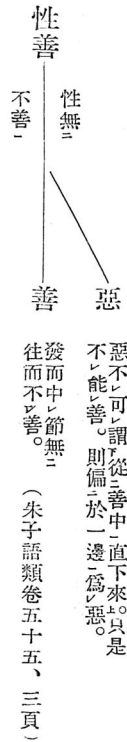
又有善惡相對之善。則是有二性矣。方其得於天者此性也。及其行得善者亦此性也。只是纔有箇善底。便有箇不善底。所以善惡須著對說。不但是元有箇惡在那裏。等得他來。與之爲對。只是行得錯底。便流入於惡矣。(朱子語類卷一百一、卅一頁)

と云へり。朱子の説に據れば性の善と現象作用の上に現はれたる善とはも同一のものなり。然るに此の説に據るときは性は善惡を超越したる無善無惡のものなれども、之れが行爲の上即ち現象の上に現はれたるとき善あり惡ありと云ふことゝなるべし。無善無惡の性より如何にして相對的善惡の生すべきや。且性善を以て賛歎の辭と爲すは性の善なるが爲めにして若し性を善に非すとすれば何人も之を賛歎するものなかるべし。然れば之を以て賛歎の辭とすれば已に性の善なることを承認したるものとなりて、此にも自家撞着を免れざる所あり。是れ朱子が胡氏の説を否定したる所以にして常總及び龜山の説に於ては此の謬りなし。故に曰く、

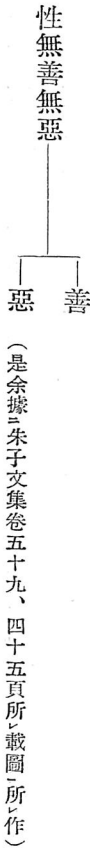
性善之善。不與惡對。此本龜山所聞於浮屠常總者。宛轉說來。似亦無病。然謂性之爲善。未嘗有惡之可對則可。謂終無對則不可。蓋性一而已。既曰無有不善。則此性之中。無復有惡與善爲對。亦不待言而可知矣。若乃善之所以得名。是乃對惡而言。其曰性善。是乃所以別天理於人欲也。天理人欲。雖非同時並有之物。然自其先後公私邪正之反而言之。亦不得爲對也。今必謂別有無對之善。此某之所疑者也。(朱子文集卷四、十二、七頁)

此れに據れば朱子は常總及び龜山の説を否定するものにあらずして此れと同一の説を爲せり。即ち朱子の所謂渾然至善。未_ニ嘗有_レ惡。と常總の所謂本然之性。不_ニ與_レ惡對_一とはもと同一の意味にして毫も異なる所なければなり。朱子が之れに對して總之言本亦未_レ有_レ病と云ひ、性善之善。不_ニ與_レ惡對_一。此本龜山所_レ聞_ニ於浮屠常總_一者。宛轉說來。似_ニ亦無_レ病。と云ひ、又常總之言。初未_レ爲_レ失。若論_ニ本然之性_一。只一味善。安得_レ惡來。人自去_レ壞了便是惡。既有_レ惡便與_レ善爲_レ對。と云へるは是れが爲めにして、その説の本旨を謬りたるものは胡文定に始まる。故に朱子は他之意乃是謂其_ニ初只有_レ善未_レ有_レ惡。其後文定得_ニ之龜山_一遂差了。(同上卷一百一、卅四頁)と云へり。是れに據れば朱子の否定する所は胡氏の説にして常總及び龜山の説にあらざるを知るべし。今朱子の説と胡五峰の説との相異を表示すれば左の如し。

性圖 (朱子之說)



性圖 (胡氏之說)



朱子の性圖は朱子語類に據りたるものなれども、胡氏の性圖は余の作りたるものなり。

然るに朱子の説に據れば既に前にも述べたるが如く本然の性はもと純粹至善にして一毫の惡なきものなれば、本然の性のまゝ發現するときには已發の情も亦善たるを得べし。而して已發の善は純粹至善の發見なれば、已發の善と未發の純粹至善とはもと異なるものにあらず。然るに人欲起りて情の活動に過不及を生ずるに及んでは惡となりて善惡相對のものとなるを免れず。然るに善惡相對と云ふも善惡同時に相並立して存するにあらず。只善は惡に對するの稱にして惡は善に對するの稱なれば善惡の本質は相對的のものなりと云ふに過ぎざるのみと云ふことゝなるべし。かくの如く解釋するを以て朱子の本旨を得たりとすれば朱子が善を以て已發相對的のものとなしたるは現象上の善に就て云へるものにして性の本體に就て云へるものにあらず。本體上の性に就ては之を渾然至善と未_レ嘗有_レ惡と云ひ又本然之性。固渾然至善。不_レ與_レ惡對。此天之賦_レ予我_レ者然也。と云ひ以て善と惡と對せざるの至善なることを認めたり。而して此の惡と對せざる渾然たる至善は即ち絕對的善を意味するものと解し得ざるにあらざるべし。蓋し渾然至善は惡と相對せざるが故なり。故に余は朱子が善を以て相對的善を意味するものと爲したるは現象上の善を云へるものにして、本體上に在りては絕對的善を認めたるものと見ざるべからざるを信するなり。然れども朱子の説は性の純粹至善なることを認むるものなれば無善無惡の絕對論とは同一に視るを得べからざるは論を俟たず。故に

朱子は此の理を説いて

天理固無_レ對。然既有_二人欲。即天理便不_レ得_下與_二人欲_上爲_レ消長。善亦本無_レ對。然既有_レ惡。即善便不_レ得_レ不_レ與_レ惡爲_レ盛衰。但其初則有_レ善而無_レ惡。有_二天理_一而無_二人欲_一耳。(朱子文集卷四十二、四頁)

と云へり。朱子の此の説は理の絶對なることを説きながら、その理纔に現象界に發現するときは相對的の理となるを説けると同一の議論にして朱子の常に取れる論法なり。故に前に引用せるが如く朱子は「大抵天下事物之理。亭當均平。無_レ無_レ對者。唯道爲_レ無_レ對。然以_二形而上下_一論_レ之。則亦未_レ嘗不_レ有_レ對也。」(文集卷四十二、九頁)と云へり。蓋し現象界に屬するものは一として相對的ならざるものなし。故に善惡の問題の如きも亦同一の議論にして、本體界に在りては渾然至善。未_レ嘗有_レ惡即所謂無對の善も現象界に現はれ來りては相對的の善となるべき理なり。故に理を以て絶對と爲せば性を以て絶對の理と爲すを得べく、性既に絶對の理なれば性の徳たる仁義禮智も亦絶對の善ならざるべからず。是れ朱子が性を以て「渾然至善。未_レ嘗有_レ惡」と云へる所以にして未_レ嘗有_レ惡の善は即ち絶對的善にあらずして何ぞや。朱子が善亦本無_レ對と云へる所以の意亦此に在り。而して朱子が常總及び龜山の説に對しても全然否定し去らざりし所以の意も亦此に在りしなり。

世の學者或は伊川が孟子の性善を解すると朱子が孟子の性善を解するとを以て其の意を異にするものありと爲し、伊川は性の本體より之を解し朱子は性の發現の上より解したりと云へる者あり。

然れども朱子が孟子の説に従ひて性の善なることを證するに情の上に發現したる所を以てしたることありしは前に述べたるが如し。然るに此の説はもと性の本體の善を説かんが爲めにして唯現象上の善を説くに止まるものにあらず。故に朱子は更に進んで孟子の説は性の本體上より云へるものとして

蓋孟子所_レ謂性善者。以_三其本體_一言之。仁義禮智之未_レ發者是也。所_レ謂可_ニ以爲_レ善者。以_三其用處_一言_レ之。四端之情。發而中_レ節者是也。蓋性之與_レ情。雖_レ有_ニ未發已發之不同_一。然其所_レ謂善者。則血脈貫通。初未_ニ嘗不_レ同也。此孟子道_ニ性善_一之本意。伊洛諸君子之所_レ傳。而未_ニ之有_ニ改_一者也。(朱子文集卷四十六、三十頁)

と云へり。然れば朱子の此の説はもと伊川の説く所と異なるものにあらず。故に朱子も自己の説を證するに伊川の説を以てし左の如く云へり。

程子曰。止_ニ於至善_一。不_レ明_ニ乎善_一。此言_レ善者。義理之精微。無_レ可_ニ得而名_一。姑以_ニ至德_一目_レ之。是也。(同上卷四十六、三十頁前文の註釋として引用せり是也は朱子の言)

又曰。人之生也。其本真而靜。其未_レ發也。五性具焉。曰仁義禮智信。(同上)

程子曰。繼_レ之者善。此言_レ善却言得輕。但繼_ニ斯道_一者。莫_レ非善也。不_レ可_レ謂_レ惡。是也。

(同上)

程子曰。喜怒哀樂未發。何嘗不善。發而中節。則無往而不善。是也。(同上)

此れに據れば孟子及び朱子の説と伊川の説との間に相異あらざるを見るべくして孟子の性善論に對しては共に本體の上より言ふものとなし、而して本體上の純粹至善は發現の處に於て認むべきものと爲せるは毫も疑ふべき餘地の存するなし。故に此の説は伊川朱子二家の説を誤解したるものと謂はざるべからず。之を要するに朱子の説は程子の説と同じく孟子に本づきたるものにして、本體上より性の善なることを説けり。但本體は寂然不動未發のものなれば、その善なることを直に認識し得べからず。故に現象界に現はれたる已發の處に就てその善を認め、是れに據りて歸納法を用ひて本性に類推して、その本體の性の純粹至善なることを認識悟得し得べきを云へり。然れば已發現象の善は即ち未發本體の善と同一のものにして毫も異なるものにあらず。而して本體上に在りては純粹至善にして惡と對せざるものなれば、此の意味にて絶對の善なりと謂ふを得べし。然れども本體上より云へば絶對善にして惡なきものなれども、現象界に現はるときは或る場合には惡の對すべきものありて相對善となるべくして胡五峰の謂へるが如きものにあらざるなり。然るに朱子は絶對善なる言を用ふるを好まざるを以て、渾然至善未嘗有惡と云へるのみにして、此れを以て絶對善なりとは云はざれども、余は惡と對せざるの善は即ち絶對善と云ふを得べきを信するものなり。